

昨 2007 年残暑の隙間を縫って吹く秋風に乗って、「鯉釣りマガジン」の発行元桃園書房倒産の噂が流れてきた。

実績のある釣り関係本出版の老舗であり、まさかと疑った。これまで続いた「鯉釣りマガジン」はどうなるのか……。やがて、倒産は確定的になり、当然、「鯉釣りマガジン」も廃刊の運命を辿ることになったのである。

また、これより先に、「大ゴイ倶楽部」が年二回から一回の縮小発行になったので、鯉釣りファンのショックは大きなものがあり、残念がる声の勢いも弱く、諦めに似たものになっていた。

秋の釣りも終盤になった頃、いろいろな釣り場で記事取材がなされてる情報があり、新たな雑誌発刊かと淡い期待がささやかれ始めたが、詳しいことは東北の片隅に住む者には深い霧の中に閉ざされたように分からない。年が明け元鯉釣りマガジンの編集を担当していた Y さんから賀状で、新雑誌「Carp Fishing」の創刊発行を知らされ、続けてメールで 2 月 8 日につり人社から発行されることなどが伝えられ、同時に「鯉釣りネットワーク」、「つり人社」の HP にも掲載された。

いよいよ待望の鯉釣り雑誌が刊行される……。嬉しさと期待感が体中を駆け巡ったが、ふと、小さな不安も広がっていった。

「ニュースタイル」の鯉釣り雑誌「Carp Fishing」とはどんなことをイメージしているのだろうか。

従来 of 鯉釣り雑誌とどう違えたのだろうか。「What s a BOILIE?」と掲げられたフレーズは本の方向性を示しているとも思える。私が描いていた期待と方向性が異なるのでは……。いろいろ考えているうちに待ち焦がれるでもなく、忘れていたわけでもなく発売日を迎えたのである。

所用があり街に出かけたついでに大型書店丸善に入ったが本がない。入荷予定もなく、取り寄せには十日以上かかるという。小さな書店も回ったがない。諦めて帰路につき仙台駅構内にある旅行者相手の本屋を覗いたらなんと 5 冊も積んであった。なにかしらこの雑誌の前途に不安を覚えながら購入し電車で読み始める。

概括所感

- ・ **綺麗** 上質紙を使用しているためかカラーが美しい
- ・ **薄い** ページ数はこれまでの雑誌と大差ないのだが、薄紙質なので重厚さが無い。
- ・ **高い** 従来の雑誌に比べると同等以下なのだろうが、外税にしたためか高い印象。
- ・ **細かい** 活字が小さく中高年者にはきついのでは。
- ・ **横書き** 馴れにもよるが縦書きより横書きを読みづらく思う読者は多い。

内容所感

・ 特集号か

ボイリー関係を集めたのか、今後もボイリーによる釣りをメインに編集発刊するのか不明だが……。日本にボイリー旋風を巻き起こす先駆けともとれる。雑誌を手にした釣友からは「やはりそうか」と現行釣り記事の少ないことを嘆く声も聞かれる。

・ 欧米か

漫才師ではないが、こう叫んでみたくなった。

・ 横文字

項目見出し等に横文字使用が多すぎる。私はとりあえず推測しながら読んだが、意味するところがつかめないものもあった。無理をして横文字を使っている印象を否めない。

横文字を使うと見栄えがよく格調高くなるのなら良いのだが、逆に読者離れを起こしかねない。横文字アレルギーの釣り師も結構いる筈。

・二重写真

鯉マガで見た記憶のある写真が載っていた。独特のポーズで複数回シャッターを押した中のものだろう。僅かな違いはあるが同一と言っていいものだ。記事内容も似たものだ。原稿不足で使ったのだろうか。信頼を損なうことになりかねない。

・広告少

広告が少なく小さい。広告は読者の情報源でもあり、雑誌の定価にもつながる。

偏見的読後感

長年、伝統の味を守り続けている素朴な店のラーメンを食べたいのに、汚い服と泥靴のまま、無理やり高級レストランに連れて行かれた感じをもった。

もう少し泥臭さのある大衆食堂的なところがあってもいいのでは……。

{ Carp Fishing }を日本語に直すと「鯉釣り」ではないか。特別に区分すべきものでもあるまい。

また、欧米の釣りが優れ、日本の釣りが遅れているなどということはない。それぞれに発達してきた文化の差はあるだろう。殻に閉じこもることなく、見習うべきことは謙虚に取り入れ、楽しみをさらに倍増充実していきたいものである。

第2号は7月下旬発売の由。大半の鯉釣りファンが喜び、第3号以下の発行を待ちわびるようなものであって欲しいと願うや切。